

支援物資を届けて来ました。。。

(2011年4月2日 8:30~4月3日 10:30)



4月2日早朝、岩手県陸前高田市のモビリア（オートキャンプ場）避難所に、有志の方々からご提供いただいた支援物資を届けに行ってきました。



陸前高田市は“壊滅”と報道されておりまして、その形容に間違いない様子を目の当たりにして言葉も出ませんでした。街は、地震の被害というよりも津波の被害で、沿岸にあったものすべてを、津波が陸地の奥まで押しやり、沿岸にあった船・車・建物は元の場所から遠く離れ、また、元の形を留めることなく壊れているという光景が、眼下に広がってありました。どこに何があったのかを示すものは、鉄骨の建物の残骸ただそれだけで、その建物の屋上にも、つぶれた車が乗っており、その建物全体が波に飲み込まれたことを物語っておりました。

地震・津波から3週間が経過しておりましたが、ゴミと化した建物や車を寄せ集めて、漸く

車両が通行できるようになったという程度で、ライフラインも寸断されたままでした。というのも、津波によって電柱は街の中に1本も残されていないので、電気を復旧するための手がかりもないという状況のようでした。

そうした状況の中で、避難できた方々は、市内にあるいくつかの避難所での生活をしておられ、今回訪問したモビリアキャンプ場も、そうした避難所の一つでした。報道にもあるように、多くの支援が形となり、不自由な生活ではあるけれど、避難所での生活をする物は何とか足りているという状況のようでした。避難所の方から聞かれたのも、「衣食住が何とかなれば、物はなければならないなりに、何とか生きてはいける」ということでした。むしろ、不安として訴えられていたのは「これから先どうなるのか」ということで、そうした中で「未来へ手がかり」として、子どもたちの通う学校の再開が強く望まれているようでした。私たちの支援も、今の生活への支援から、未来の生活に向けた支援に切り替える必要があると強く感じました。



【ニーズ1】学校再開の準備のために

望まれる「学校の再開」についての情報を得るために、地域の方のご紹介で、陸前高田市立小友中学校の加藤清校長先生にお会いすることができました。中学校は、校舎の1階（職員室・校長室・特別教室）が全て流され、体育館も鉄骨だけが残ったという状況だったそうです。生徒数は37名という小さな中学校ですが、震災当時は卒業式の前日で、午前授業だったために、街に出かけていた7名の生徒が津波に流されて亡くなったとのことでした。小友中学校は小友小学校が隣接しておりますが、そちらは、1階にあった教室が全て流されて、2階にあった職員室などが辛うじて残ったとのことでした。学校関係のすべての資料が流され、生徒も亡くなるという中で、3月30日に卒業式・修了式を終え、4月20日に学校再開を目指しているとのことでした。

陸前高田市は、壊滅的被害の中で、市庁舎と一緒に多くの職員も亡くなられ、教育長・教育次長・学校教育課長も犠牲になり、教育委員会も機能しないという状況に陥ったとのことでした。それでも、学校の再開は、地域の人々の強い願いのようで、「子どもたちが、学校に行く」という中で、避難所での生活にもメリハリがつくということが期待されているようにも見えました。こうした要望の中で、学校近くの公民館が、先生方の避難所となり、先生方もそこで寝泊まりしながら、学校の再開を目指して少しずつ動きだそうとしていました。それでも、避難所にあるのは、小中共有のパソコン・プリンター1台ずつと僅かな文房具だけでした。子どもたちの学用品等は支援物資の中にあり、準備は整いつつあるようですが、学校再開の準備のために教師たちが必要とする物が足りていない状況が見えました。



【ニーズ2】子どもたちの居場所と継続的にかかわること

街の壊滅的被害の中で、大人たちは現在の生活をまわしていくことで精一杯の状況にあり、子どもたちのことまでは手がまわらないという現状でした。私たちが会った子どもたちも、狭い避難所の生活の中で、大人の邪魔にならないようにしている様子が、随所に見受けられました。「今、ミーティング中だから、中には入れないよ」と

話し、じっとそれが終わるのを待っていたり、「おばあちゃんが具合が悪くて休んでいるから、部屋には入れない」と話したりしていました。こうした子どもたちの様子からも、学校の再開が強く望まれているのだということが見えました。ただ、学校が再開すれば、災害前の日常が手に入るわけではなく、学校が休みとなる土日に親元でゆっくり過ごせるかと言えば、それもまた違うようで、そうした土日に、イベントが企画され、子どもたちが遊べる場所が確保される必要があります。

今回、いちよう団地で活動する外国人当事者団体「すたんどばいみー」のメンバーが3人同行しましたが、その1人である宮脇英理は、ある子どもと、次のような会話をしましたと言います。

子ども：お兄ちゃんが津波で死んじゃったけど、僕はどうすればいいんだろう。

英理：お兄ちゃんのことを忘れないで、頑張って生きていくことじゃないかな。

子ども：でも、顔なんてだんだん忘れちゃうよ。

当然のことながら、支援をしようとする者が、気をつけなければならないこと、また、支援する者に求められる力量は、たくさんのことがあると思います。宮脇英理は、この会話の後からいろいろ考え、近々、またその子にあって、その問いを一緒に考えたいと話していました。先に述べた子どもたちを楽しませるイベント的企画を単発に終わらせず、ある程度の期間、「継続」することも、今回得られた重要な結論の一つです。

【今後の支援の方向】

今週末から夏休みに入るまでの間、陸前高田市の小友小中学校を中心として、子どもたちと遊んだり、勉強したりする企画をもって、毎週末訪問するような支援ができないかと考えています。それと並行して、学校で必要とされている支援物資を届けるという、人的・物的の両面からの学校支援を目指したいと思います。

今回の訪問の感触として、被災した地域の物資に関するニーズは、刻一刻と変化していて、今日聞いた必要物資を半月後に届けても間に合わないという状況にあることがわかりました。来週末には物資が届けることを約束することで、それを当てにして、学校は授業や行事が進められるそうです。もちろん、そうした物資の支援も、市や教育委員会の機能が復帰してくれば徐々に減ってくることも予想されます。

また、今回訪問してわかったことは、陸前高田市は壊滅的な状態でしたが、少し内陸に入ると全く被害がないということでした。このギャップは、生活用品の調達のために地元の人が街を離れて戻ってくる時の「大きなギャップ」として感じることで「夢であってほしい」「何かの間違いだ」「いや、これ現実だ」という葛藤を、幾度となく感じると、避難所の方は話されていました。ですから、内陸からの物的支援は、様々な形でなされているようで、今後継続的に必要とされるのは、人的支援ではないかと思われました。

今後の支援の方向は、以上のような現状把握に基づき、今回のメンバーで暫定的に検討したものですので、今後も継続的に、物的・人的両面からのご協力をお願いします。

【ご協力に感謝!!】

東日本大震災の被害の大きさに、NPO 法人教育支援グループ Ed.ベンチャーの有志が集まり、「私たちに何かできることはないか」と検討しました。当初は、関東圏でもできる支援をと考えまして、神奈川県で募集をかけておりました「ホームステイボランティア」に応募もしました。しかしながら、いろいろな情報を集める中で、そうしたホームステイ受入が被災者のニーズにあっているかどうか分からないと感じたこと、また、陸前高田市のように行政機関が被災しているような場合には、行政主導の支援がうまくいくかどうか分からないということも感じられるようになりました。

そのような中、陸前高田市もモビリア（オートキャンプ場）の知り合いと連絡がとれ、そこが避難所になっているという情報を入手したこと、また、東北自動車道の交通状況の情報が入手したことをきっかけとして、被災地のニーズを探るべく支援隊を結成した次第です。復路には、ニーズがあればホームステイ受入者を連れて戻ること想定しておりましたが、先のようなニーズ把握の中で、支援の方向を転換して戻ってきました。往路には、提供いただいた物資とご寄付からの買い出しを支援物資として、モビリア避難所・小友小中学校の教員避難所に届けて参りました。

ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

■今回の支援隊のメンバー

家上幸子・柿本隆夫・清水睦美・チューブサラーン・西岡歩・宮脇英理

■届けてきた支援物資

○モビリア避難所

水、ティッシュペーパー、トイレットペーパー、ウェットティッシュ、消毒剤
マスク、おむつ（子ども用・大人用）、子ども用下着（男子・女子）、生理用品
大人下着（男性・女性）、靴下（大人）、体ふき、Tシャツ、タオル、おもちゃ
駄菓子

○小友小中学校の先生方の避難所

ガソリン（30リットル）

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、物資・寄付を含む）

西舘健吾、石井良輔、齋藤敏郎、松田洋介、清水いく江、清水雄策・美枝、児島明、川上泰彦、川見直衣、座間三菱自動車、丸源自動車、ミレニアム

今後の継続的な支援活動のためのご協力をよろしくお願いします。

【東日本大震災支援に関わる寄付の振込口座】

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180 Ed.ベンチャー東日本大震災支援

NPO 法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

